

京都府からみた同志社

重久篤太郎

「同志社視察之記」

およそ三十年前に筆者は外務省記録を採訪した時、外国人雇入関係文書の中から明治十年代に京都府知事から外務卿に報告した「同志社視察之記」を見出した。それは明治十二年から足かけ五年にわたって、視察記事のな

い上申を含めると明治十七年に至る間は毎月末に京都府学務課掛員が同志社英学校および同志社女学校の外国人宣教師の授業を視察した報告書である。京都府の郵紙で毛筆で書かれていて、その報告記事があるものは二十七回におよんでいる。そのことは当時同志社関係者に話しておいたが、この史料は利用さ

れることなく今日に至っている。しかし、最近筆者は「同志社視察之記」を再び見る機会があつて詳しく読むと、この報告書は同志社史の空隙の一部を埋める貴重な新史料であることを再認識したのである。

この視察記は本来雇入外国人教師の業務科目取調べを目的とするものであった。しかるに、榎村正直知事時代の京都府学務掛は偶然に同志社に至り、その教場における外国人教師の授業の実地の状況を詳細に記録したり、ある時は公然と視察することをさせて秘かに他県人と称し、その子弟が入学を志望するためであるといつて諜者的な立場から調査している。

榎村正直知事は同郷の先輩である内閣顧問木戸孝允の紹介によつて新島襄先生を知つて、当時の京都府の殖産興業政策のために新島朝の新島を府博物館顧問を委嘱したり、府顧問の山本覚馬を紹介した。その結果新島・山本の両者が結社して、同志社英学校を設立するに至つたのである。ところが、榎村は本戸の幹旋があつたから同志社設立に力を添えたので、実はキリスト教嫌いであつた。一方において仏教側の反抗もあつたので、榎村は同志社開校の直前に新島の博物館御用掛を解任した。さらに榎村は同志社を廃止しようと計つて、いろいろと手をつくして新島の進路を絶たうとさえ企てた。そのため新島は榎村知事任中は第二公会の会堂建築を見合せて、榎村が元老院議官に栄転して去つて、新島知事北垣国道が来任してから会堂建築に取りかかつて明治十四年十月新会堂開堂式を執行了したのである。

それ故、「視察之記」を見ると、榎村知事時代の府学務掛の報告は決して同志社には好意的でなかった。例えば明治十二年（一八七九年）五月に第一回の同志社視察をした学務課長横井忠直のごときはデヴィスの授業をみ

て、聖書の教授であるとして始末書の提出を再度要求したりしている。

ところが、北垣国道知事の時代になると事情は全く一変する。新島先生自ら「諸事自由任地主義なる」と評された北垣知事は、新島社長を信頼したのであるが、北垣が京都府知事となった明治十四年（一八八一年）一月以降の府学務掛の報告書は、もうキリスト教を探索する調査ではなくなつて、単なる「学校視察記」となっている。同年十一月の「同志社英学校視察之記実況之儀上申」には、

同志社英学校ニ到ル、本校ハ府内私立学校中ノ冠タル者ニシテ生徒徒員數百有余名外国教師一名ハ故アリテ帰国セル由、從來此校ヲ卒業セシ生徒ハ相当ノ学力ヲ有シ風儀亦淳良ナリ、……教師生徒ノ間至極親切且生徒温厚ノ色面ニ顯ハル
といった賛辞に満ちているのには驚く。

明治十二年の英学校校舎

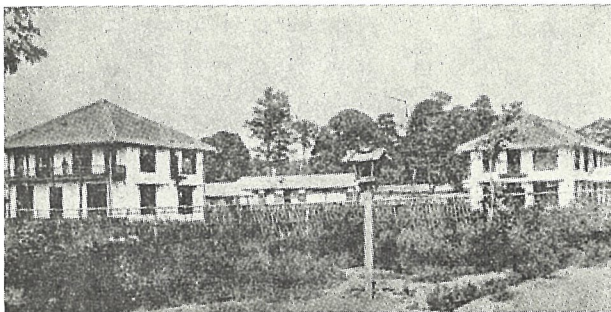
明治九年九月相国寺門前へ移転した時の同志社英学校の校舎は、木造二階建方型の建物二棟であつて、第一寮、第二寮とよばれ、二階を寄宿舎とし、階下を教室と食堂に用い

た。つづいて同十年九月に第三寮が建ち、同十一年九月に第四寮が落成した。それから明治十六年に最初の煉瓦建築が建てられてからは、初期の教室兼寄宿舎の様式が分化して、煉瓦建築は教室となり、木造建築は寄宿舎と化した。

教室と寄宿舎とが分化する間の校舎建築のことを語る史料があるので、明治十二年五月二十八日付の府学務課長横井忠直の視察報告から次に紹介しよう。

○同志社ハ府下上京区第十組相国寺門前ニ在リ、地所凡ソ六千余坪塾舎凡テ四字、其三字ヲ教場及ヒ生徒寮トシ其一字ヲ食堂トス、食堂ハ北ニ在リ、三字ハ二階建ニテ東西ト南ニ在リ、南ト西ノ舎ニ教場凡ソ六ヶ処アリ、其他ハ皆寄宿生ノ居ル所ナリ
これは英学校の校舎であるが、その西校舎には「書籍室」があつた。同年十月の視察記には左の如く記している。図書室記事の初見である。

書籍縦覧室ノ長サ（四間許）ニ從フテ中央ニ高サ四尺許ノ見台アリ、台ノ上面ヲ為シ生徒ノ立読ニ便セリ、台上和欧文ノ新聞紙アリ、欧文ノ分ハ専ラ宗教ニ関スルモノナ



明治9年秋、相国寺門前にできた学寮

リ、和文ノ分ニハ東京日々新聞アリ、又和歐兩段ノ七一雜誌（教法關係ノ雜誌）アリ、室ノ西側ニハ洋書ノ數百部ヲ備フ、多クハ皆聖書ノ部類ナリ
次に神学館の前身ともいふべき、最初の聖書の講義教室にあつた破屋の記事を引用して

みよう。これは創立当初榎村知事が校内での聖書の講義を許さなかったため、門前にあった二階建の豆腐屋の廃屋を新島校長個人名義で買って、俗に「豆腐屋」とよばれる「三十番」教室である。現在のアーモスト館管理人住宅の位置にあったという。明治十二年十月付「同志社視察記」第四回に左のごとくに出ている。

この「ゴスペル科」の教場の所在は、「当校本門即チ球場ノ西北隅」の社長新島襄の抱家であると記している。この十月の一日新島社長は、来校の府学務掛と次のような問答を試みた。

(問フ) ゴスペル(教祖ノ伝)科ノ教場ニ至リ見シコトヲ要ス

襄曰ク、該教場ハ前キニ述ル如ク正課外ノモノナレハ、教科申ノモノニアラス、然レトモ請求セラレハ誘引セン、乞フ俱ニ来レト

輒チ門前ノ一弊屋ニ至ル、頗ル狭ノ外ヨリ聖書ヲ読ム声ヲ聞ク、襄先ツ入り來人ノ旨ヲ通ス、教師ラールネット及ヒ生徒一同立礼ス、曰ニシテ襄去ル、教師ラールネット馬可(耶穌教徒弟ノ一人)ノ伝ヲ平仮名交

リノ訳書ヲ以テ十四名ノ生徒(年齢十三四ヨリ十七八ニ至ル)ニ授ケ居レリ、生徒皆各該書一冊ヲ手ニス、教師之ヲ輪読セシメ一名読ミアル毎ニ疊々和語ヲ以テ其義ヲ講スル尤懇到、或ハ生徒ヨリ不審ヲ質セハ詳カニ之ヲ説明ス(中略)室内狹隘不潔ナリ、壁ニ黒板二枚ヲ掛ケリ、又一ノ粗製ノ地図アリ、即チ巴勒斯坦^{パレスチン}及耶路撒冷^{エルサレム}等悉皆耶蘇宗伝播關係ノ地ヲ点記セリ、案スルニ彼レ要スル所ノ此等地図ヲ求メント欲スルモ別ニ其適恰ノ図ヲ得サルヲ以テ悉ク皆是レ彼等ノ手製ニ成ルモノナラン

この門前の破屋「三十番」教室は、聖書の講義所としてばかりでなく、時には教室として使用したことは、「視察之記」第七回、明治十三年一月の記述に見える、「校門前ノ東ノ一小屋デゴルドンガダルトン氏生理書ヲ教エル」という記述によってもうかがうことができる。

また「同志社九十年小史」の「神学部」の一節に、「明治一三(一八八〇)年に速成神学科なるものを英学校に付属せしめて、特別の研究者を入学せしめ、毎年第三期、すなわち四月より六月の終りまで次のような科目を

教授していた。……」とあるが、「視察之記」の明治十三年四月付には次のような記事がある。

午前八時將ニ業ヲ始ントスルノ時ニ当リ年長(廿年以上ノ者)ノ生徒数名皆各翻訳ノ聖書ヲ手ニシ、該校本門前ノ一破屋ニ行クモノアリ又歸ルモノアリ、時ニ教師ゴルドンノ該屋ニ向フテ行クヨ見受ケタリ、続テ年長生徒又料名各二名宛ニテ腰掛数台ヲ運搬セリ、蓋シ此生徒等ハ年長ニシテ正則ヲ踐テ其業ヲ達セントスルモノナラン乎、

明治十二年の女学校校舎

英学校から転じて、同志社女学校の校舎のことに移る。明治十二年五月二十八日付の「視察之記」には、

○同志社女学校ハ今出川通寺町西へ入町北側二条家旧邸地ニ在リ、地所凡ソ四千九百坪、中央ニ校舎アリ、層楼東西ニ長ク兩翼ヲ北ニ張り結構尚ホ新タニ頗ル眉目ヲ爽ニス

○教場ハ現今彼広濶ナル一箇所(筆者注、疊敷ト別ニ)ノミヲ用フ、教場上即チ西翼ノ楼上ハ寄宿室ノ為メナレトモ今生徒少員

ナルヲ以テ姑クレールネットノ旅館ニ貸シヘタリト云、正面待客室ノ上ハ教員ノ寢室ナリ、東翼ノ楼上ハ現ニ寄宿所タリ、中央ニ通路アリテ兩側ヲ居室トシ皆疊ヲ數ク、一室ノ広サ概ネ四疊半或ハ六疊、生員各二名ヲ容ル、酒掃極メテ清潔ナリ

○東西翼ノ間ヲ運動所トシ秋千アリ、又体操ニ用ル木製ノ玉棒及ヒ投擲ニ用ル俗アリ、袋ハ木綿ヲ用ヒ、中ニ豌豆ヲ入レタリ、○東翼ノ楼下ヲ食堂トス、其南ノ方ヲ教員ニ充テ北ノ方ヲ生徒ニ充ツ、生徒ハ皆坐シテ食フヘク設ケタリ、此亦外国教員ノ注意スル所ニ出ツト云

この記事にある外国教員とあるのは、ミス・スタークウエザーを指している。この時には、まだミス・パーミリーは女学校に來任していない。また当時ラーネッド夫妻は女学校生徒寮中に寄寓していたことが知られる。

英学校の男女共学

筆者は明治二十年五月湯淺治郎が東京府に提出した模範幼稚園設置願「東京の幼稚園」都史紀要一四の中に記された、設立者の妻で保母をつとめた湯淺はつの履歴に、

一明治十一年九月西京同志社英学校ニ入学

同十二年十月迄英学並ニ漢学ヲ修ム

とあるのをみた。はつは徳富蘇峰・菅花兄弟の姉にあたり、同志社英学校に入学するまでに、五年余り熊本洋学校、慶応義塾で英学を修めているので、当時まだ学科内容のこのてい不在女学校よりもやや程度の高い英学校に入学したことは当然と考えられた。しかし、当時の英学校は男女共学であつたかどうかということについては一応疑問をもった。

もっとも、新島先生は女子教育に対して當時としては非常に進歩的な考えをもっていたので、同志社英学校で男女平等の教育が行なわれたことは想像されるところでもあつた。

「視察之記」第一回、明治十二年五月の英学校の部には、ここに学ぶ女学校生徒の記述がある。

○次ノ教場ニ至レハ女子二名アリ、将サニ算術ヲ講習セントス、幹事曰ク、此ヲ女学校三年生トス、数学一課ノミ來ツテ此校ニ学フナリト

さらに、「視察之記」第三回、明治十二年九月を見ると、新任教師ゴルドンの性理学の講義の受講生徒中に女子二名があつて、次の

ごとく書かれている。

○教員エム、エル、ゴルドン教員席ニ就キ生徒ヲシテハーブン氏著述ノ性理学書ヲ取ラシメ、前日授ケタル所ヲ發問シテ其記憶ヲ試ミ而シテ後其書ヲ輪読セシメ一名読了スル毎ニ具ニ其ノ義ヲ講スルコト太タ親切ナリ

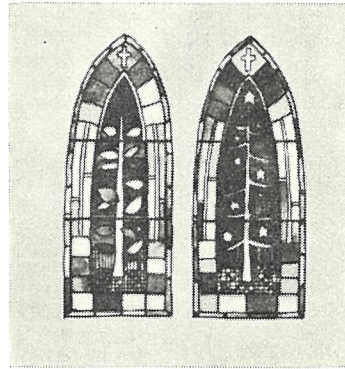
○氏場ニ在ルモノ七名内二名ハ女子ナリ、曰ク是ヲ第五級トス、現今在校生徒中ノ高足ナリト

右の一節は断片的なものに過ぎないが、初期の同志社における男女共学を物語る一史料として尊重すべきである。この十二年六月にはいわゆる熊本バンドの余課生徒十五名が卒業しているから、右の記事にある第五級生は当時英学校最高学年の生徒である。おそらく二名の女子生徒中の一人は湯淺はつではあるまいか。

以上は新発見の史料の若干を紹介するに過ぎないが、なおこの新史料は多くの興味ある記述を含んでいる。

(校友・京都市立美大教授)

も 歌
ど 美
こ 讃



星 野 三 雄

極少の引照ではあるが、「礼拝と音楽」(昭和三十九年五月号)に相馬恵助が『「こどもさんびか」の諸問題とその改訂について』という論文をかかれた中で、こどものための讃美歌の短い歴史が僅か半頁ほどのべられている。しかし、これは余り簡単で、専門家は別として、一般のものにはその内容をほとんど

1

知ることが出来ないのではないかと思ひ、今日なかなか手に入りにくい原本を手もとに集めてこれを参照しつつこどものために讃美歌がどんなに苦心してつくられてきたかを回顧してみることにした。

明治三十三年四月大阪での福音同盟会の席上、原田助の提案で共通讃美歌をつくらうという提議がせられて、その編纂がすすみ、「さんびか」が出版されたのは明治三十六年とな

ってしまった。このさんびかの中には、われわれの親しんでいる「主われを愛す」という歌がすでに入っていたが、これは、さんびかの中でも特に古い歴史をもつもので、明治五年九月二十日の宣教師会議でバラが提案した次の訳にその源をもっている。

「エスワレヲ愛シマス、サウ聖書申シマス
彼に子供中、信ズレバ属ス、ハイエス
愛ス、ハイエス愛ス、ハイエス愛ス、サ
ウ聖書申ス」

そして、これを記録した本願寺の間諫正木護は註をして「和語に直訳し婦女子小童を誘引スル為ニカツ□直訳再稿ノ上出版致ス由也」としているで、こどもとさんびかの問題は開教当初から宣教師の間で考えられていたのであった。

こうした間に、新潟駐在の宣教師ブラオンが明治三十四年十月二十五日警醒社から「ゆきびら」というこどものさんびか集を出版した。これには大和田建樹が序詩をかいているが、曲は外国のものであるにしても、言はほとんど日本人の作詩で、大和田建樹のものが多数をしめているが、その中に長坂鑒次郎(明三〇卒)作が五つ、足利武千代(明二八卒)

作が一つ入っていて、同志社人が早くからこどもの神への賛美をもとめていた一つの証しともなっている。

明治四十年（一九〇七）日曜学校協会が成立すると、それを動機にして、讚美歌第二編は日曜学校と家庭のために「讚美歌第二編」を明治四十二年に出版した。前者が個人の色彩が強かったのに反して、これはまた公的なことのための讚美歌として劃期的なものであった。この編集には、各派の代表委員十二人の中に、小崎弘道（明一二卒）と三輪源造（明二三卒）が含まれ、実務は、青山学院の別所梅之助と同志社の三輪源造がこれにあたり、ジョージオルチンがこれを助けた。この二編には、合唱譜と共に、オルガンやピアノの伴奏のついた曲があり、編集の苦心と共に不統一の感をまぬがれない。子供の言に外国のうたをうつそうという努力は充分みとめられるが、「ここへおいで、さあおいで、おまちなさる、エスさまが、こゑをあげて、エスさまを、おほめませ、ほめませ」（第八など）は、何かまだ日本語になりきっていない感じがする。別所のうたは著しくロマンで「かほぞひやなぎ、絮はしろく、赤楊のふさは、

たれてあかし」（第四十四）のような形体が多く、三輪のうたは「われらはあめより、ふりしづく、ちひさくあれども、愛のひかり、やどす珠ぞ、やまよりたにより、きたれともよ……」のように内容的なものを強くだしている。この二篇の序文の一部には「教会内にて、日曜学校こそ、年の老いたると少きとを問はず、一様に就いて学ぶべきものなれとの信念の増しゆくに従ひ、おのづからよしと決めらるるにいたらんか」とあり、その編集の気概をうかがうに足りる。

2

こうした気風が、子供のうたう讚美歌の速進をうながしたのか、大正年代に入ると次々に、作詩も作曲も日本人のものが沢山に現れるようになってきた。大正九年十二月一日日曜世界社発行の永井幸次編曲の「讚美歌マーチ」（第一編の賛美歌から二八曲を選出してマーチ風に編曲したもの）が出版され、大正十一年十月一日には由木康、津川圭一の共著で同社から「聖書唱歌」なるものが出版された。これには「日曜学校及家庭用」と副題がつけられて、旧約関係六詩曲、新約関係三詩

曲がいられていて、物語を詩にかえた新しい試みである。ついで、大正十四年三月二十七日、津川圭一の詩曲で「銀の星」があらがぞら社から発行された。絵入りで十二のうたがこれにはのっている。この本には、さんびかからの編人も数篇はあるが、斎藤潔、中田羽後、津川圭一、新保民二、高橋一子の詩が入れられていて、この新保は数年間同志社で学んだことがある。同年の四月一日、日曜世界社から発行された津川圭一の「日曜学校音楽」という新書版の二四六頁にわたる指導書は、そうした勢いに内容的に力を与える原動力となった。これは、一部日曜学校と音楽、二部準備的方面、三部教授法、四部演奏法、五部礼拝と音楽、六部特殊な会合と音楽の各部に分かれていて、その各部が更に四ないしは五の小項目にわけられ、こどもの音楽指導を理論づけた唯一の書物であった。こともと讚美歌の今一つの前進力になったものには、日本日曜学校教会が発行していた「日曜学校」という月刊雑誌に、季節ごとに子供のさんびかを募集して掲載したことがかぞえられる。そして、その中に同志社人である大中寅二（大九卒）が幾度となく作曲を発表してい

ることも覚えておく必要がある。こうして
いる間に、日曜学校協会は、さきに刊行し
た「讃美歌第二編」がだんだんクラシックに
なつてゆくのに考慮をはらい、「日曜学校讃
美歌」の編集をはじめたことを特筆しなげば
ならない。この書は、大正十二年十二月十二
日にその初版を出版したが、その途上すでに
印刷の手順が出来上つたその間に、九月一
日の関東大震災にあひ、その原稿と原版全部
を失うという不幸に見舞われたが、委員の努
力で二三を除くほかほとんどはじめの企画通
りのものとして出版することができたとい
う。この編集には草川寅雄、由木康、津川主
一、中田羽後、玉置真吉、岩村清四郎（大二
卒）の六名が携り、交読、祈禱文を加え、前
奏曲、後奏曲を加えて時代を先導する意気に
燃えており、出版以後三十年間、全国の日曜
学校で子供たちに愛唱されてきた。そして、
昭和三年にその改訂版が出版されて終戦後
におよんだのであるが、このさんびかの日曜学
校に与えた功績は言以上のものがあつたとい
えよう。この日曜学校讃美歌の出版前、昭和
十年五月二十五日に日独書院から「をさなご
のうた」という由木康、津川主一編著の子供

の歌集がでたことがある。これは第一部自然
のうた（十五曲）、第二部生活のうた（十五
曲）、第三部遊戯のうた（十四曲）、第四部宗
教のうた（十曲）からなっており、第四部と
他の部にさんびかと見られるものがいくつか
はあるが、それは宗教のうたとはいえてもさ
んびかとはいえない。日曜学校協会は、その
後昭和六年四月十日に協会創立二十五年記念
として単音譜付児童用「日曜学校讃美歌」を
一万部発行したが、これはまさに新しい時代
に向つての希望の燈火であつたといえよう。

3

昭和七年四月十日、日曜学校上級生または
中学生向きの「新興讃歌」第一編、第二編と
いうのが大阪音楽学校楽友会出版部から出版
されたが、歌は宮川勇、曲は同校教授の永井
幸次の作曲で、第一編は第一部四季篇（二〇
曲）、第二部十二月篇（十一曲）、第二編は
第三部年中行事篇（二十九曲）、第四部雑詠篇
（十二曲）からなり、紀元節、地久節、国歌、
農民の歌、労働者の歌、職工、漁夫の歌等を
含み、生活のすべてをあげて讃美したいとい
う意図がはっきり現れている。昭和十四年十

月二十日、教会音楽社から津川主一編著の絵
入の「フレーベル愛育保育歌曲集」、ついで
その註釈も出たが、これは完全にこどものう
たであつて、讃美歌とはいえない。が、昭和
十五年四月三十日同社から出た津川主一作曲
「日本こども聖歌集」は完全な讃美歌といえ
るもので、五十曲のうち数曲の津川主一の歌
もあるが、ほとんどは由木康の作詩である。

昭和十六年四月二十八日、讃美歌委員会の
編集で「青年讃美歌」が発行されたが、これ
には交読文が巻末に付され、日本人の作曲に
よる新曲の部五四曲が加えられた。この讃美
歌の中には、三輪源造の詩が一篇入っており
新曲の部の作詩者には別所梅之助、青島為夫
*、小河原虎三（昭二卒）、須藤隆子、今井義子、
賀川豊彦、三浦清一、結城建六郎、由木康、
友井楨、関根文之助、佐波亘、長谷川初音、
山室民子、小野村林蔵、豊田実、山室武甫、
*、長坂肇次郎其他があげられ、作曲者も多数に
渉り、その中には同志社の森本芳雄（昭三卒）
も加っている（上表作詩者中*印は同志社関
係者である）。この年の十二月六日、大東亜
戦争の宣戦布告が発せられたが、それよりも
先に、当時の在日基督教三十二派が合同して

日本基督教団が成立した。そして、昭和十九年三月十五日教団日曜学校局は、出版局より一〇七の讃美歌と四つの前奏及び行進曲、並びに交読文を含む「日曜学校讃美歌」を出版したが、これは皇国、大東亜という項目を含む讃美歌戦時版ともいふべきものであった。この時の出版局代表は海老沢亮で同志社人である。

4

戦後、教団日曜学校部が八一曲からなる「日曜学校讃美歌」を昭和二十五年九月五日に井田俊司の編集で発行したが、これは、交読文と信仰告白を含む九七の讃美歌と行進曲、間奏曲をもって編成されていて、のちの「こどもさんびか」の母体となったものである。昭和二十八年、委員は旋律だけを記した児童用の「こどもさんびか」を出したが、数版を重ねたのち、伴奏のあるものがほしいとの多くの要望をうけて、小泉功を伴奏用さんびかの編集者としてあげ、昭和二十九年十一月山北多喜彦こどもさんびか編集委員長の名で出版したが、これは現在まで続いている。

基督教保育連盟は、こどもさんびかでも、

なおむづかしさをおぼえる五歳児以下の子供たちの礼拝を考え、幼児さんびか委員会をつくり、昭和三十一年七月「幼児さんびか」を完成してこれを出版した。これが今日まで続いている幼児のもつ唯一のさんびか集なのであるが、現在はその改訂が進行しつつあるという。この中には外国の曲も相当あるが、大中寅二、小泉功が新しいものの作曲校閲にあっている。

この他、個人のもので深津文雄訳編「こども聖歌集」が昭和二十八年七月二十五日に発行され、昭和三十七年その改訂二版が出版された。これは主にドイツコラールを中心にしたもので、まだ一般にはなかなか行きわたっているとは思えない。また日本福音ルーテル教会教育部教会学校さんびか編集委員会が「教会学校さんびか」を聖文舎から昭和三十八年四月一日に出しているが、日曜学校を教会学校としている点に特色ある態度がみられ、「こどもさんびか」に並べられる内容もっているといえる。更に、大中寅二、津川主一著で、「こどもの歌、若人の歌」というのが日本基督教団出版部からでているが、この中にもさんびかとして充分用いられるものがい

くつか含まれている。このほか、いのちのことは社から「救の聖歌集」や「あたらしいこどもせいか」なども出している。

とにかく、成人用の場合でも、讃美歌に加えて一般活動の際にうたえる讃美歌をもって二編をつくらうとしている時、子供の明るい生活の中から、野に山に家に街に、主を唱えるうたがこどものためにもつとあってもいいと思う。大正十二年版の日曜学校讃美歌の序文で今村正一が「宗教の基調は礼拝である」といって讃美歌は礼拝でうたわるものだけというような狭い内容のもとに私共はさんびかを釘づけしてしまつてはならない。海辺で山で、丘で、花の野で神をたたえ、踊ってさんびする。そうした体でうたう讃美歌が子供の中に——礼拝用のさんび歌の必要は充分にみとめながら——あつていいと思う。

(終りに、昇天した先輩も現役の先輩も沢山いられるが、歴史の事実として敬称を略したことを御容赦頂きたい。)

(昭三大神卒、城南教会牧師)